

# 1. 本研究の経過

## (1) 調査研究活動

今年度も新型コロナウイルスの流行のため、思うような調査を進めることができなかった。海外での資料調査はもちろん困難で、国内での調査も第5波のデルタ株の流行のあと、オミクロン株の流行開始までの間に資料調査ができただけであった。

国内での調査は下記のようなスケジュールで小林が行った。

2021年10月12-13日及び同26-27日に、国立公文書館と国立国会図書館で日清戦争期までの台湾の海図を調査した。初期の台湾の日本製海図は英国製海図の翻訳(覆版)で、アルファベット表記の地名を現地調査なしで漢字表記したため、誤記が発生し、その改善過程を検討したものである。これは「台湾遠征～日清戦争期までに台湾の主要港湾について作製された英国製海図の翻訳(覆版)にみえる地名表記」というタイトルの論文を執筆し、現在学術誌(日本地図学会の『地図』)に投稿中である。

また11月25-27日には、国立公文書館・国立国会図書館で台湾の海図の補足調査を行うほか、防衛研究所で現在準備中の日露戦争期までの日本の気象観測の海外への展開を追跡する論文に必要な図版のほか、日露戦争期の地図作製に関する重要図版の撮影及び複写申し込みをおこなった。なおこの一部については、本号の表紙や報告に画像を示している。

以上の限られた資料調査のため、つぎのような作業をデスクワークとして行った。まず、昨年度購入した日本陸軍製の地図を中心に手元にある関係地図を検討し、解説と目録を準備し、本号に掲載することとした。くわえて清末期の江蘇省で作製された2万分の1図を縮小した2万5千分の1図の日本陸軍による複製(幸い大阪大学文学研究科東洋史学教室がそのマイクロ撮影プリント

を所蔵)の検討と目録作製を行い、やはり本号に掲載することとなった。

これと並行して、昨年度にひきつづき日露戦争期の日本軍の地図作製について検討し、今年度は野戦用地図に焦点を合わせた学会発表を行った。

小林茂 2021. 「日露戦争期に日本陸軍が戦況に応じて編集した野戦用地図とその資料」2021年人文地理学会大会 (ID: 209) 2021年11月21日.

この発表では、日露戦争期の初期から日本軍は戦場で鹵獲したロシア軍製の地図に依存することが多く、とくに末期にはロシア軍に特有の8万4千分の1図を、縮尺を変更せずに翻訳して刊行するようになったことを報告した。

以上のほか大坪は19世紀後半の中国とロシアの国境交渉を取りあげ、とくにその西北部について作製された中国側の地図を検討した。日清・日露戦争期の地理情報の収集と活用をテーマとする本研究では、当該時期に地図が重要な意義を果たした局面の一つとして中国とロシアの間の国境画定もあると考え、昨年度来研究に着手しているもので、大坪はイリ問題などに関する自身の研究をふまえつつ、近年中華民国外交部から国立故宫博物院に移管された外交交渉に関連する北西部国境の地図類の画像(故宫博物院の特別展の図録に掲載)を検討した。また「中俄交界全圖」(1890年、アメリカ議会図書館蔵)のような中国側の外交官がヨーロッパに在任中に印刷した図もとりあげ、ロシア側の作製した地図に依存する中国側の外交事情を示した(本号掲載の「19世紀後半の清露間の国境画定交渉と地図作製」)。

なお本号では、前号(12号)にひきつづいて、『測量随録』(1943年編集)に収録された陸地測量部の古参の測量技術者の回想を掲載する(大田寛之「『測量随録 原稿』とその内容について(2)」)。日本国内の測量だけでなく、20世紀初頭に「教習」

として勤務した中国の測量学校での体験、さらに外邦測量の経過など、『陸地測量部沿革誌』に現れない側面を知ることができ、今後も掲載の予定である。

このように、コロナ禍でも可能な研究を行っているが、以下今後行いたい海外での調査について、言及してみたい。

## (2) 海外の資料調査の期待

海外で資料の閲覧を行いたい機関としてまずアメリカ議会図書館がある。同館には、第二次世界大戦終結直後に接收した日本陸軍製の印刷図ならびに陸地測量部に保存されていた日本以外の地域に関する手描き図が収蔵されている。このうち手描き図には 1880 年代に陸軍将校が中国大陸や朝鮮半島を旅行して作製したトラバース測量図が注目される（約 500 点）。また日露戦争期については、旅順のロシア軍の堡塁や砲台の図がある。これらについてはすでに調査を行い、『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』（2017 年刊、大阪大学出版会）などで概要を報告しているが、それらに紛れて日清戦争期の手描き図や初期の海図もみられ、調査が必要である。

また印刷図では、1905～1906 年に刊行された江蘇省と福建省の「東亞五万分一圖」がオンラインの目録で確認され、これは国立国会図書館のもの（16 図幅）よりよくそろっている（51 図幅）。すくなくともこの一部は、1900 年に陸地測量部の測量手、久間金五郎らの測量（本誌 12 号 97-98 頁参照）によるもので、今までよく知られていない日清・日露戦争期作製の地形図として注目される。「厦門事件」（1900 年 8-9 月）のような日本軍側の中国南部への思惑も関連しており、調査が必要である。

なお「東亞五万分一圖」は遼東半島でも臨時測

図部により作製されたことが確認できるが、まだ日本国内ではみつかっておらず、この探索も行いたい。

アメリカ議会図書館収蔵では、ロシア製図も注目される。これまで 16 万 8 千分の 1「奉天省行軍路図」（1901-2 年、本号「日露戦争末期の満洲軍総司令部ならびに第一軍作製の野戦用図」参照）など関連図を撮影して検討しているが、その他の縮尺の地図についても検討が要請されている。とくに日露戦争中に日本軍が多数作製した翻訳図のもとになったロシア製図が発見できる可能性に期待したい。

同館ではシベリア出兵期のロシア製図が多数収蔵されているのを確認している。日本軍と並行してアメリカ軍も出兵を行い、その際に接收されたものである。この中には、日露戦争期の満洲に関する地図が紛れ込んでいることが期待される。これには日本がロシア製図を翻訳して作製したもの（第二次大戦後日本で接收されたと考えられる）も含まれており、多彩な構成であるが、この分類作業を検討してみたい。

さらに中国とロシアの国境画定に関連しては、同館蔵の上記の「中俄交界全圖」の実物のほか、関連の中国図、さらにはそのもとになったロシア製図を参照できる可能性がある。

以上に加えて、台湾の故宮博物院での資料閲覧も期待される。とくに本号所載の大坪の報告にみうる中華民国外交部から移管された国境の地図類は、中露交渉史を検討してきた前の世代の研究者が参照できなかった資料であり、期待が大きい。合わせて故宮博物院の研究者との意見交換も有益なものとなろう。

一日も早く新型コロナウイルスの流行がおわり、海外調査ができるようになることを期待したい。